

チューリップ。

四季だより



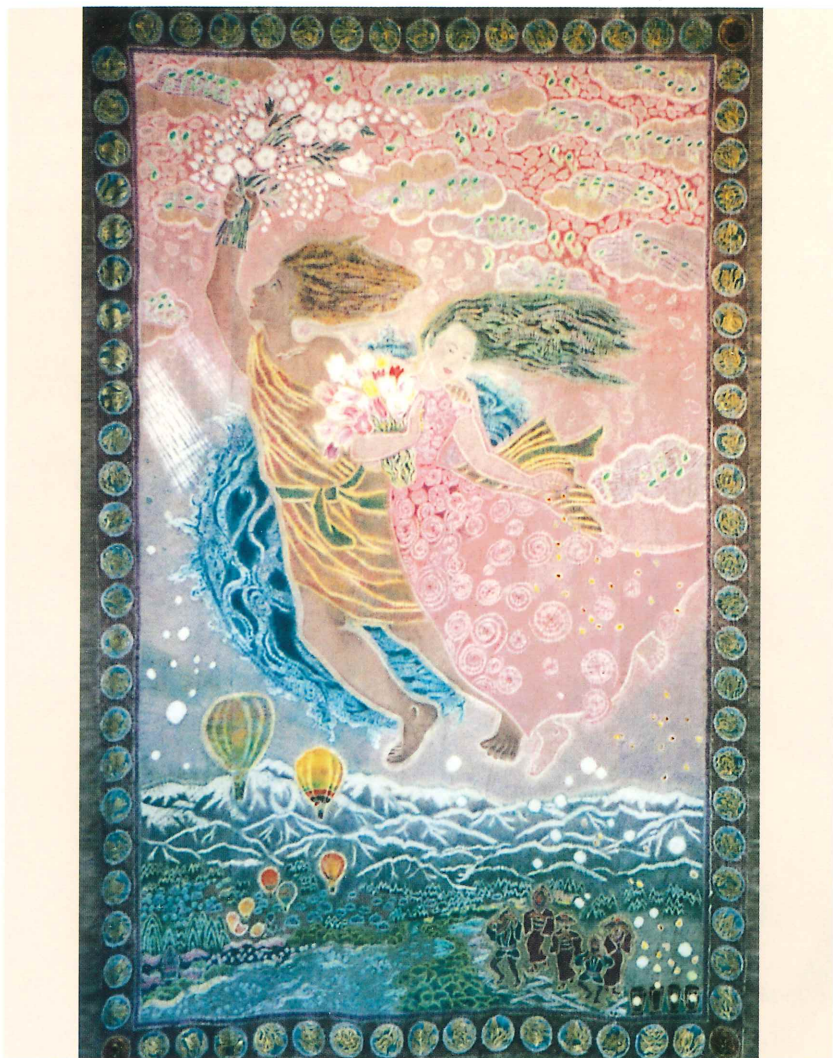
写真撮影 トウルハン・バイトブ

1997. 春号
Vol. 2

随筆

フローラ in TONAMI

染色作家 中川 善子



“フローラ in TONAMI” 絹綾地タペストリー、チューリップの各種の花と藍染



花を摘む、筆者

花色の 雲とほらみ
風琴の奏べ 空に満ち
花の女神 来りてうたう
女神の掌を 泉として
生まれし 小さな花の種
指の間より 放たれて
輝き… 舞い…
大地におりて いのちを育む

VIVA! TONAMI!
immortal FLORA!
時の流れを 花と共に

チューリップの花に導かれて、初めて砺波を訪れたのは、もう十年余り前になる。

列車の窓から見える風景が、富山に入った辺りから、家並みの合間に、色とりどりのチューリップの花畑が見えかくれし、わあーすごい、すごいーと、感嘆の連続だった。そして砺波は、もう本当に素晴らしい花、花、心、心で迎えてくれ、ただただ目頭を熱くして、夢中で時を過ごしたようだった。

それまで棄てられてきたチューリップの花を、染色材料として生かせることの喜びを身体いっぱい受けとめ、講習会に参加された方々は、まるで少女のようなキラキラと輝く瞳をして、熱心に私の話を聞いておられたことを思い出す。

もう二十数年、チューリップの花の息吹きを染め、物を生み出すことに関わってきて、今や私にとっては、チューリップの花は、なくてはならない存在である。むしろ、チューリップの花によって、自分自身が育てられていると感じることも多い。

春ごとに、あちこちの公園で、街角で、たくさん咲く花

はあるけれど、とりわけチューリップの花を見ると、“やあ、元気そうだね”と声をかけたくなる。“ええ、元気よ!”と返事をくれる。ついつい傍へ寄つてなでてやりたくなる。不思議なものである。

それ故に、チューリップ四季彩館は、私にはとても嬉しい場所である。何よりここでは、四季を通してチューリップの花が咲いているからである。しんどい時や、疲れて仕事に手がつかないような時は、いつでもここを訪ねて、花に励ましてもらうことができる。

遠くても、あそこで、今、チューリップの花が咲いている……そう思うだけで心が暖まってくる。思うだけで元気が出ない時は、一生懸命に花に会いにゆけば、花はきつと笑顔で迎えてくれるにちがいない……嬉しい限りである。

思えば、随分とチューリップの花にお世話になつてきたものである。何か花に恩返しをと思ひ続けてきたが、昨年のチューリップ四季彩館の創立を記念に思い立ち、チューリップ花の素描百選に、今取りくんでいる。幾春かかるかわからないけれど、千種以上もある品種の中から、百種を

選ばなければならず、選にもれた花々には、少々心を痛ませ、堪忍、合掌して、精いっぱい賞でることにしよう。

陽ざしの下いっぱいに咲くチューリップの花に、スケッチブックを持つて対峙するのがとても楽しみである。

ほんとうに多くの花は、いつの世も人の心を和ませてくれる。花の多さが平和に比例するように、人の暮らしが、花と共にあつて欲しいと願いつつ、チューリップの花を、一花一花描いてゆきたいと思う。

《略歴》

なかがわ よしこ

滋賀県出身、京都市立芸大にて学ぶ。

一九七〇年 染色の道に入る。
一九八〇年～八三年 京都府工美展入選(京都府買上げ)、染織作家展入選、入賞
以来毎年京都、大阪、神戸、仙台等全国各地で個展開催(花の万博出展、一九九六年砺波市のチューリップ四季彩館展示、高崎市染色工芸館個展、京都府立文化芸術会館での「一心一歩花びら染め展」等が著名)



砺波とチューリップー前編ー

「チューリップ四季彩館ミュージアムより」

た雪に負けない特産物、チューリップの発展の経緯を見てみましょう。

砺波の自然と

チューリップ

砺波でなぜチューリップ栽培が盛んになったのでしょうか？

その理由の一つに好適な自然条件を挙げることができます。

庄川の扇状地である砺波平野は、球根生産に適した砂壤土と水排けのよい礫層からなり、そのうえ用排水路が完備して、チューリップの生育に適した水の管理を行うことができるのです。

また、冬の間、雪で地表が覆われることで地中の温・湿度が平均に保たれ、初期の生育がスムーズに運ぶとともに、その低温が春以降の成長を順調に進める効果があります。

さらに、球根の肥大最盛期である開花からの約一か月間は、年間でも最も日照が多く、盛んな光合成で球根への養分の蓄積が十分に行われるのです。

これらの条件に目を付けた先覚者達によってチューリップは砺波に根付いていきます。

ヨーロッパから日本へ、

そして、砺波へ

チューリップ

は江戸末期

(一八八八年)

に著された「本

草図譜」にチ

ューリップの

名称で初めて

日本に紹介さ

れ、文久三年

(一八六三年)

にフランスか

ら日本初のチ

ューリップ球

根がもたらさ

れました。

わが国での

球根生産は、

大正時代に入

って、まず太

平洋側の神奈

川県や千葉県

で試みられま

したが、いず

れも不適地と

栽培技術の未

熟さから失敗

に終わったの

でした。一方、日本海側では大正三年に新潟県の小田喜平太氏、大正七年には富山県東砺波郡庄下村(現砺波市矢木)の水野豊造氏が球根生産を始めました。これが砺波のチューリップ栽培の始まりです。

▲本草図譜より(静嘉堂文庫蔵)

チューリップ

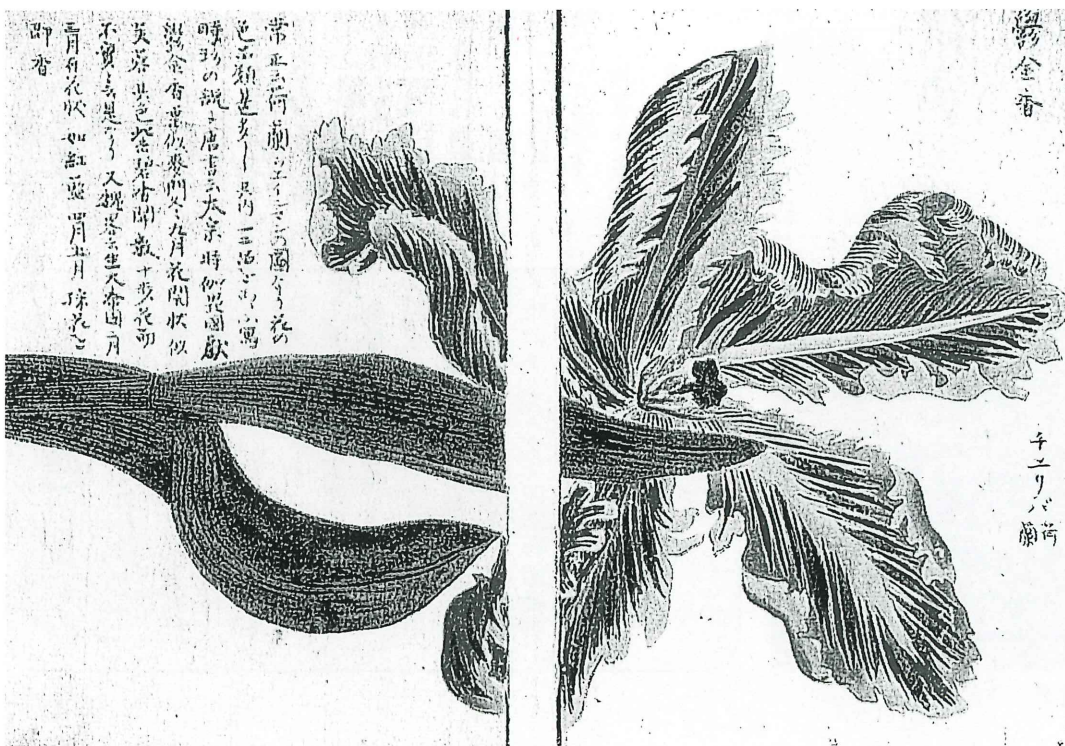


▲砺波平野の散居村

チューリップの里「砺波」は庄川扇状地に広がる散居村。カイニヨと呼ばれる屋敷林に囲まれた家々が水田の中に点在します。

この地方を含めて富山県の農村はかつて「積雪寒冷単作地帯」と呼ばれていました。これは雪の期間が長く、稲以外に適切な作物がなかったことを一言で表したものです。

さて、この富山、砺波の地で育っ



常正の荷蘭花... 色は紅と白... 花の形は... 葉は... 根は... 三月有花... 四月五月... 即香

チューリップの育ての親

— 水野豊造



水野豊造

明治三十一年、水野与七郎の長男として生まれた豊造は、幼い頃から農業に親しみ、植物への関心を育んでいきます。大正七年、豊造二一歳の時、種苗商から求めた一〇球あまりのチューリップ球根を植えこみ、翌春、切り花として市場に出すと、一本五銭（当時米一升二六〇四九銭）の高値で売れたではありませんか。「こんなに高く売れるなんて！」水



野青年の栽培意欲は一気に高まるのでした。

初めは切り花を目指した栽培も、たまたま掘上げた球根が植えたものよりも立派に肥っていたことから球根生産を思い立ちます。

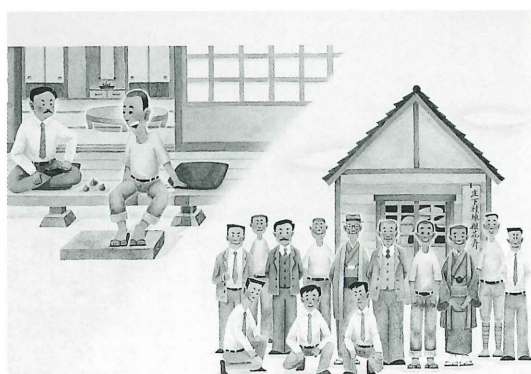
そこで、技術者として早くからチューリップを試作していた四谷順三氏（現砺波市鷹栖）のアドバイスを受けながら、大正一二年ごろから水田裏作として本格的に球根生産に着手することとなるのです。

組織づくり

の始まり、そして

輸出へ

ニックネームが“機



関車”と付けられるほどひたむきな豊造は、大正一三年、一三人の仲間たちとともに庄下球根花卉実行組合を結成。これにより栽培者の組織化と生産体制が整います。



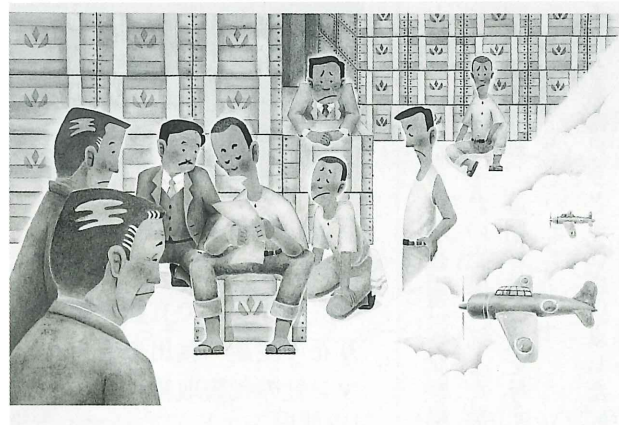
ところが、栽培農家も生産も増え順調かに見えた球根栽培も、販売に当たって思わぬ障害にぶつかったのです。出荷への思惑から、組織は二つに分裂、七〇八年にわたって争い、組合も機能しなくなってい

まいりました。

これを憂いた庄下村の大地主根尾宗四郎氏や、その他数名の有志によって事態収拾の努力が重ねられ、昭和一〇年に「砺波輸出球根花卉出荷組合連合会」設立、同一三年「富山県輸出球根出荷組合連合会」を設立し混乱に終止符が打たれたのでした。

そして、本格的に輸出が始まります。昭和一二年アメリカに向けて行った少量の試験輸出が、昭和一五年には四〇万球と伸び、さらに、昭和一六年には三〇〇万球の輸出を契約、すべての集荷を終え出荷を待つばかりでした。しかし、そこに届いた一通の電報により、すべての努力が水の泡となるのです。

— 三号へ続く —



T.M.ハークマン氏に聞く

球根の輸出継続と新品種などについての情報交換のため平成九年三月中旬に数日間砺波市に滞在されたT・M・ハークマン氏にいろいろと伺いました。

★富山に来られるようになったきっかけは？

チューリップ生産農家に育った私は、幼いころ読んだアメリカの雑誌で富山からアメリカへのチューリップ球根の輸出と、富山のチューリップ球根生産の発展性についての記事を目にしました。

一八歳から五年間ヨーロッパ中を巡って研修を重ね、その後父の会社に戻り、球根と促成切り花生産を始めたのでした。しばらくして球根の

輸出も開始しました。

一九八八年春、韓国での花の展示会に訪れた折に、かねて日本に興味を抱いていた私は、東京にある国際球根センターの紹介で富山県花卉球根農業協同組合を訪ねました。

球根生産者同志ということもあって組合の人々と意気投合、これをきっかけに、その秋に私としては日本で初めて富山へチューリップ球根を輸出し始めたのでした。

最初は船輸送でしたが、途中クレーンが故障し二五万球すべてがだめになり、急いで一八万球を空輸しました。翌春、花が咲くと生産者は大喜びしてくれたものです。その後富山への輸出も順調に伸び、組合からの研修生、大表氏の紹介で、

日本の大手種苗業者との取引もでき販路も拡大されて、現在にいたっています。

★オランダのチューリップ産業の現状についてどう思われますか？

展望は明るいですよ。二〇年前は切り花の販売先は一〇〇％花屋でしたが、現在ではスーパードも販路を拡大し、割合的には花屋三〇％、スー

パー七〇％となっています。しかも花屋への三〇％は二〇年前の一〇〇

％の販売量とほとんど同じです。つまり消費量も生産

量も拡大しているのです。更に東ヨーロッパへの市場拡大で、ますます順調に伸びていくことでしょう。

★環境問題が叫ばれている今、オランダでも肥料、農薬などの使用に規制があると聞きますが？

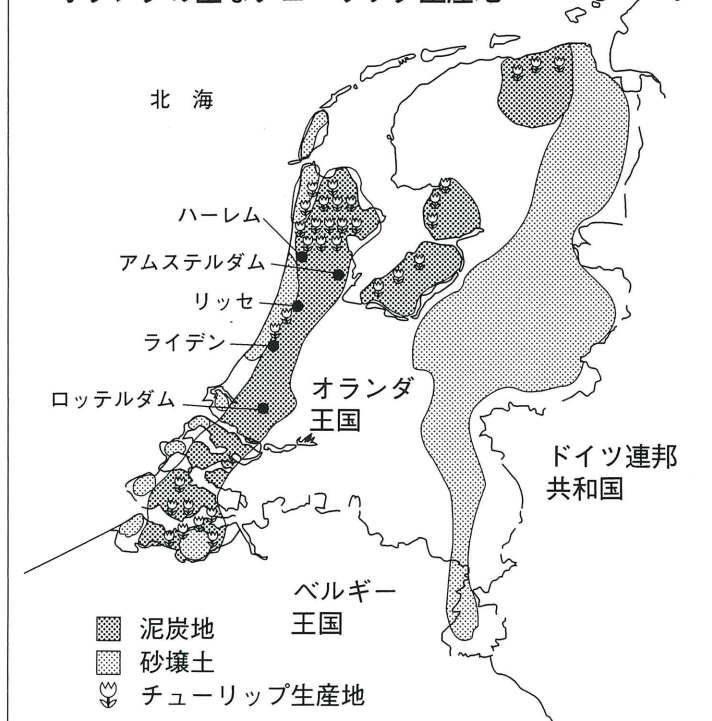
数年前までは各生産者がそれぞれに肥料・農薬などを適当に施用し、冬期に多用した肥料が河川に流れ出すことなどもあり、その汚染が問題



T.M.ハークマン

1943.11.11 オランダに生まれる。オランダで有数の球根と切り花の生産・輸出を行うハークマン社の代表取締役

オランダの主なチューリップ生産地



'97となみチューリップフェア

“花・愛あふれるまち砺波”

春の風物詩、『'97となみチューリップフェア』が4月25日(金)～5月5日(祝)までの11日間、砺波チューリップ公園を中心に開催されます。今年で46回を数えるこのフェアは、新しく砺波市美術館もオープンし、さらにエリアを拡大します。会場一面に咲き誇る350品種、100万本のチューリップとともに夢いっぱいのイベントをお楽しみください。

◇場 所

砺波チューリップ公園（富山県砺波市花園町）

◇開園時間

午前8時から午後6時まで

◇入 場 料

	一般	団体(20人以上)
大人	900円	800円
小人	400円	300円

※チューリップ四季彩館、砺波市美術館も入場できます

◇駐車料金

大型車2,000円・マイクロバス1,000円・普通車400円

※金額は消費税を含みます。



となみチューリップフェア

チューリップ四季彩館催し物（チューリップフェア期間中）

◇チューリップホール「フラワーショー」

“幻想と楽園のハーモニー”



ここは水の楽園、さわやかな水の音が聞こえてきます。しぶきを浴びるチューリップの花々とともに、心安まるひとときをお楽しみください。

◇2階 セミナールーム

『松岡真澄 植物画展』

（NHK趣味の園芸表紙画家）

チューリップを始めとした、四季折々に咲く花の風情をそのままに描いた植物画。水彩画のさわやかな画風をお楽しみください。

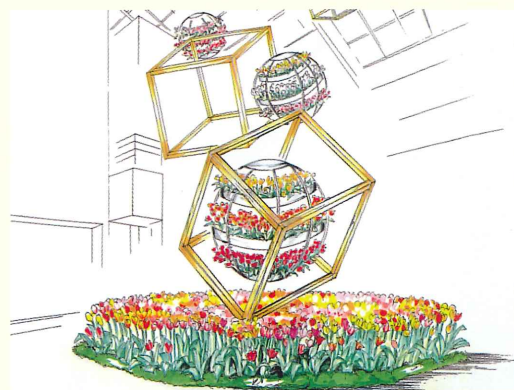
その他、一年中チューリップが見られるチューリップスクエア、チューリップについて楽しみながら学ぶことができるチューリップミュージアムも併せてご覧ください。

※チューリップフェア期間中は、チューリップ四季彩館単独でのご入場はできません。

◇チューリップテラス

“春 おどる”

球体と四角形がおりなす不思議な感覚の世界。チューリップや春の花々が球になって踊り始めます。光降り注ぐテラスの陽気な花たちに会いに来ませんか。





◇表紙のチューリップ
スプレングェリ/Tulipa sprengeri
(野性種)

1894年紹介される。花弁内側は鮮
緋色で下方は深赤色。外側は花底
に向かってオリーブ色が次第に濃
くなる。葉は明るい緑色で光沢が
ある。チューリップの中で最も開
花が遅いものの1つ。



チューリップ四季彩館
TONAMI TULIP
GALLERY

(財) 砺波市花と緑の財団

〒九三九一三

富山県砺波市中村二〇〇一

☎ 〇七六三ー三三ー七七一六

FAX 〇七六三ー三三ー〇〇九〇